



# アンニョンハセヨ！ ハンゲルは楽しい！

—ハンゲルを学ぶ高校生と市民に会いに行ってきました—

今号のスナップは前橋市内の共愛学園高等学校と教育プラザでハンゲルを学ぶ人たち取材しました。

## 共愛学園高等学校

### 自己啓発セミナーの高校生



学園を彩る花々

共愛学園と言えばかつては前橋市の中心部岩神町にあり、そこに通う女子高校生のセーラー服姿が市民に親しまれていました。その共愛学園が1998年（平成10年）に市の東部、小屋原町に移転、同時にセーラー服はボルドー色に変わり、翌年には男女共学となって11年が過ぎました。ここで、ハンゲルの講座が開講され、本フォーラムの会員である朴順子さんが講師をつとめています。最近、ハンゲルを学ぶ市民が増えているようですが、高校の授業で学ばれる例は多くありません。高校生はいったいどんな理由で、どのようにハンゲルを学んでいるのでしょうか。瀧口、白石、倉林の3人で訪問しました。

## 草花に迎えられて

7月7日、七夕の日の午後、私たちはこの共愛学園高等学校を訪ねました。正門から校舎に向かう道の左右に植えられた桜の木はすっかり立派に育ち、季節になると見事な花を咲かせるそうです。この日はバラやアジサイ、プランターに植えられたペチュニア、マリーゴールドなどの花々が私たちを迎えてくれました。その数の多さは小中学校も含めてよその学校では見たことがないほどです。

## 個性尊重の取り組みの一環

本校舎は4階建て。玄関を入ると下駄箱がないことに戸惑いましたが、靴をはいたまま教務主任の安藤先生に校長室に案内されました。校長先生には会えませんでした。安藤先生からハンゲル講座についてのお話をうかがいました。ハンゲルは現在、自己啓発セミナーとしての選択授業で2年生と3年生が勉強しています。ほとんどの生徒が進学を目指している中で、コンピュータ、ワープロ、ダンス、中国語、英会話、ハンゲルなど、自分の個性を伸ばすことのできる授業を選択することができるシステムだそうです。

廊下を歩いていると、どこの誰だかわからない私たちに男子生徒たちが「こんにちは！」と声をかけてくれました。外部からのお客さんに胸を張って人と向き合っていることにとっても好感がもてました。実はその声の大きさにちょっとびっくりしながら「こんにちは！」と負けずに挨拶をして4階の教室へ。今日の授業は5、6時間目の連続授業。

## 5時間目はパッチムの勉強



パッチムの説明をする朴先生

生徒は男子2名、女子6名の合計8名。今日の教材は「ハングル練習問題5 ☆発音を聞いて○△◇□パッチムを書き入れましょう」と書かれたプリント。もちろん、プリントにはハングルがいっぱい書かれている。事前学習をしていない私にはさっぱりわからない話が続く。まず、繰り返される「パッチム」がわからない。「パッチム」とは1音節末にくる子音のことらしい。ハングルではこの綴りや発音の違いを知ることが求められる。アンドーナツ、アンミツ、アンコのそれぞれの「ン」はどのように発音されますか？舌の位置は？』と質問は続く。日本語ではあまり意識しない「ん」もハングルでは文字も発音もしっかり区別するようだ。難しい！ハングルは難しい！

### ハングルを選んだきっかけは？

そもそも高校生のみなさんが選択授業としてハングルを選んだきっかけは何だろう？朴さんが4月に授業を始めたときに生徒にアンケートを行ったそうです。それによると

- ◆ 大好きな映画を見て、ハングルってすばらしいなあと思ったから。
- ◆ 韓国の文化に興味を持っていたから。韓国語をしゃべれたらいいと思ったから。

- ◆ テレビとかで韓国ドラマをいろいろやっていたりするので、勉強したいと思って。
- ◆ 親が韓流ドラマにハマっていて、すすめられているうちに少し興味が出てきたから。
- ◆ 韓国ドラマをみたりして韓国にハマったから。
- ◆ 韓国について興味を持ち、ぜひハングルの学んでみたいと思ったから。
- ◆ 韓国の文字が書けるようになったり会話ができるようになりたい。

というものだったそうです。韓国映画や音楽の影響は大きいようですね。確かに最近のテレビは韓国ドラマをたくさん放送している。韓国人歌手や芸能人が登場しない日はないと言っても言い過ぎではない。彼らのせりふや歌詞が理解できたら、彼らとコミュニケーションできたら、と思うのも頷けます。

このほか、「なぜ北と南にわかれてしまったのか」「韓国と日本の生活の違いは」などの疑問も書かれたそうです。

### 休み時間に

チャイムが鳴って休み時間。「ハングルの授業はどう？」と生徒にインタビューしてみました。

- A くん： 楽しい。日本語にはないところを教えてもらえるので。
- B くん： ためになる。日本語にない発音を学べるのが楽しい。
- C さん： むずかしい。でも覚えられたらうれしいなと思う。
- D さん： 楽しい。ちょっと単語とかわかるようになると、韓国人がしゃべっているニュースとか、あ、これ言ったとちょっとわかるので、
- E さん： 楽しい。知らない国の言葉がわかるので。

F さん： できれば楽しいんですけど…、難しいんで…。先生はわかりやすく教えてくれるけど。

G さん： 楽しい。韓国語を学ぶことで、韓国への関心がわいてきたから。

H さん： 他の授業と比べると、充実している。

A くん： 朝鮮戦争のこととか、イムジン河のこととかも、話してくれた。

授業中、難しい説明をする朴先生をじっと見つめていたA君に率直に聞いてみました。

「今日の勉強は難しくありませんか？」

「うううう……」

「私は聞いていると頭が痛くなりますよ。」

「でも、会話も教えてもらっていますよ。『アンニョンヒ カセヨ』『アンニョンヒ ケセヨ』とか。」

「それはどういう意味ですか？」

「さようならのことだけど、去る人に対しては『アンニョンヒ カセヨ』、とどまる人に対しては『アンニョンヒ ケセヨ』というんですよ。」

「なるほど。」

## みんなで歌った6時間目

6時間目も小さい「ッ」にあたる3つのパッチム。(k、t、p)。クッパp、ピピンパp、に付くパッ(p)はご飯の意味だけれど、朴先生の名前もパッ(k)、畑の発音もパッ(t)。よく似ているが区別して発音しないと誤解が生じる、とのこと。

授業の終盤は七夕の話題。織姫と彦星、牽牛と織女の年に一度のデートがどのように行われるのか?と朴先生が生徒に質問すると、しばしざわめいてから女子生徒が「鳥が」と言う。これは鋭い答えだった。中国や韓国に伝わる話では、カササギという鳥がたくさん並んで天の川に橋をかけ、その橋を二人が渡ってめでたく再会するのだそうです。カチカ

チと鳴くこの鳥は日本ではカチガラスと呼ばれたそうです。日本にはいなかったこの鳥を朝鮮半島から持ち帰ったのは戦国武将。「カチカチ」の音が「勝ち」につながり縁起が良いと考えたそうです。私たちも知らなかったことでした。



カササギ

締めくくりは挨拶言葉、自己紹介など、これまでに習った表現の確認。生徒はつい、テキストを見たくなるようですが朴先生は「見てはいけません」と釘をさす。そして今日の授業の締めくくりはなんとバースデイパーティー。朴先生が「今月が誕生日の人!」とたずねると3人の女子生徒が挙手。そこで朴先生は「ハッピーバースデイトゥーユー」をハングルで歌い始める。

歌い終わると一斉に拍手。これを3人のために繰り返す。そして3人に誕生日の日付をたずねたところ、なんと、まさに今日が誕生日の○○○ちゃんがいた。そこで一同の祝福の気持ちを込めてもう一度合唱。大変な盛り上がりの中に本日の授業終了。



ハングルで歌ったハッピーバースデイ



## 異文化交流の現場

こんな風に、友達を祝福する気持ちを表現しながらハングルを学べると本当に楽しい。七夕伝説について詳しく知ると、隣の国がぐっと近く感じられるようになりました。私たちは日本と朝鮮半島の異文化交流の現場に居合わせたと感じました。

今年 2010 年は、1910 年「韓国併合」から 100 年。日本と朝鮮半島は、単なる「異文化交流」ではすまされない重い歴史を背負っています。在日二世の朴順子さんは、植民地時代に日本に渡ってきたご両親とともに、両国の歴史に翻弄され、苦悩を身に刻んで生きてこられたと聞きます。しかし、今、「地球人になりたい」という朴さんは、時代の新しい流れの中で、若い世代とともに学ぶ喜びと共生の夢をつないでいます。

この先、この授業の中で生徒の皆さんはもっとたくさんのお言葉をおぼえ、朝鮮半島の文化についてももっと深く理解するようになることでしょう。将来は、二文化間のかけ橋となって交流を深めてくれることを期待します。取材に協力してくださった共愛学園高等学校のみなさん、朴先生、本当にありがとうございました。

(文責：倉林 順一)



生徒と会話する朴先生



七夕伝説の話に耳を傾ける

## 朴先生の授業を参観して

ふだん何気なく発音している日本語の「ん」と小さな「つ」。ハングルでは三種類四種類と発音がはっきり区別され、文字にも発音の形が含まれていることを初めて知りました。

日本語とハングルの共通部分と違いが、朴先生の楽しくテンポの良い授業でわかりやすく生徒に伝わります。

奇しくも今日は七月七日。朴先生の朝鮮と日本の懸け橋になろうという深い思いと日朝の文化を軽やかに行き来する精神が感じられ、授業はとても充実したものでした。ありがとうございました。

白石ひろ美 (会員)



# 前橋市ハンゲル中級 講座で学ぶ市民



熱気あふれる会場

## 冬ソナ・チャングムにひかれて

7月9日(金)、前橋は恒例の七夕祭り初日だったがあいにくの雨。それでも第三コミュニティセンターで市の国際交流協会が開設している「ハンゲル中級講座」の教室は活気にあふれていた(国際交流協会は1990年以来、英語・中国語・ハンゲル・スペイン語・イタリア語の初・中級計10コースを開設している。他にポルトガル語の初級短期講座や英語の入門講座も)。この日の出席は男性6人に対し女性21人(欠席3人)。文化活動に参加する男女比の極端なアンバランスは、日本中どこも同じ傾向なのかもしれない。

なぜハンゲルを学ぼうと思いついたのか。以下は、当日見学させていただいたスタッフ3人がそれぞれお聞きした「動機」のまとめ。

一つにはハンゲルそのものへの興味から。一人の女性受講者は、ハンゲル文字の〇と一を組み合わせたような不思議な形に魅かれ、美しいと思ったのがきっかけだという。

ある男性は、韓国旅行の際、韓国の男性がしゃべる言葉の末尾に「～ヨ」と女性言葉のような発音をしていることが気になり、帰っ

てラジオ・ハンゲル講座のテキストを買い求めたのがスタートだったとか。

別の男性も、韓国旅行で聞いた「木浦の涙」という流行歌が心に残り、やはりラジオ講座での独習を6年間続けたが、独りで学ぶことに限界を感じてこの講座に参加した。今はともに学ぶ仲間からの刺激もあり、充実した学習だという。

「北朝鮮のテレビで、ひたすら將軍様をたたえる女性アナウンサーのあの独特の言い回しを聞いた時、へえ、世界にはおもしろい言葉があるもんだと思ったのが最初。でもこの講座にずーっと参加し続けているのは、朴先生の魅力。単なる語学でなく、広く文化について学び、考えさせてくれるから」との声も。

二つ目の動機はいわゆる「韓流ドラマ」。全員にアンケートをとったわけではないが、ハンゲルを学ぶきっかけとしての回答では第1位を占めるかもしれない。

ある人は「冬のソナタ」をあげ、別の人は「チャングムの誓い」が好きで…と答えてくれた。お気に入りのドラマを見るのに、できることなら日本語吹き替えでなく原語で理解できたらこんなすばらしいことはない、と考えたのだそうである。

ところで当日の教室ではどんな学習が展開されていたのか、お邪魔した3人の「感想」でつぶってみたい。

## 皆さんの「声」に・・・

鈴木みどり(会員)

(朗読を楽しむ会でご一緒している) 朴さんの「ハンゲル講座」を見せていただきませんか? という瀧口さんのお誘いで気軽に出かけた私でした。

受講者さんたちの席のうしろに、私たち見学者も着席。皆さんと一緒に「授業を受ける」かたちになりました。

といっても、私は「ハンゲル」に関しては、

全くの素人。黒板に書かれているハングル文字は、○やーを組み合わせた単なる「記号」にしか見えませんし、朴さんと皆さんの間で交わされる、にこやかな、流暢(?)な会話も、意味がほとんどわからない…。

でも、それだけに、新鮮な発見があったのです。それは、皆さんの「声」。・・・なんという、明確な、芯の通った声で読む(話す)方々なんでしょう…。

この方々は「一斉に読ん」ではいますが、決して「声を合わせて」読んではいません。言ってみれば、おひとりおひとりが教材と向き合い、自身で確かめながら出す声が、たままた束になって全体の声になっている…そんな印象なのです。

こんな「読み」には久しぶりに出会いました。皆さんの「学び」への姿勢が、声を通してまっすぐ伝わってくるようで、心地よい時間でした。

受講者さんの意欲に応える朴さんの、温かさ・懐の深さも改めて感じつつ、帰路につきました。

## 再チャレンジへの思いが…

藤原 麗子

過去に一度、ハングルに挑戦し、挫折した経験があります。文章はなんとかなくても、聴力が追いつきません。日常的にしゃべる機会もなく、自然に遠ざかってしまいました。

それだけにみなさんの意欲的な学習姿勢に圧倒されました。1時間半があつという間、もちろん私話したり、居眠りなんてする人は一人もいません。講師である朴順子(パク・スンジャ)さんの魅力あるレクチャーが受講生のみなさんを刺激し、啓発しているのでしょう。私が話を聞いたある女性は、「講座のある毎週の金曜日が待ち遠しい」と話しておられました。

以前、尹東柱(ユン・ドンジュ)の詩をハングルで読み、味わいたいと思いながらかな

わなかった夢を果たすために、私もこの講座に入って再挑戦してみたいと思ったのでした。

## 学ぶ姿って美しい

内藤 真治

平均年齢はかなり高いと思われる受講生のみなさんの、大きな声での発音を聞きながら、高校の教室ではとてもこんな風にはいかない、と考えていました。とにかく校歌だって、蚊の鳴くような声しか出ないんですから。

強制もなければ、学歴や受験・資格目的で「しかたなく勉強する」のとは違い、自主的に学ぶ姿のなんと生き生きしていることか。

それにしても、最も近い外国の言語を聞きながらまったくチンプンカンプンとは…。それでも時々聞こえた「ウリ・ナラ」という言葉に、ああ、「我が国」のことだァ。

今年は平城遷都 1300 年とやらで、1 年間奈良県や奈良市は大騒ぎですが、ナラはもとも朝鮮半島で「国」の意味。いくら脱亜入欧の近代史といっても、日本文化に大きな影響を与えた隣国の言葉にこれほど無知でいていいわけないよなあ、と思ったことでした。



朴先生に質問する参加者